



彼の薫陶を受けた生徒の中には「長崎の

戦前、旧制松江高等学校(現島根大学)のドイツ語の教官として、十四年間にわたり教壇に立ち、生徒に大きな影響を与えたドイツ人哲学者、フリッツ・カルシュ(Fritz Karsch) 写真が亡くなって来年で三十年になる。いまや、ほとんど忘れられていた彼は、人がどのようにものを認識するかというところを考究する学問である人智学を提唱したドイツの哲学者、シュタイナーを日本に紹介した人物でもある。二十一世紀を迎えて、日本を第二の故郷として愛した氏を顕彰することは日本だけでなく、日独関係や日本の哲学史研究の上からも大きな意味があるのではないかと。彼は一八九三(明治二十六年)、ドイツ東部のプラゼビッツで生まれ、一九七一(昭和四十六年)、カッセルで没した。大正十四年に松江高校に赴任、多くの人材を育てた。同時に日本の哲学や宗教の研究に力を注ぎ、昭和十五年からは外交官として終戦まで東京で暮らした。松江を選んだのはフカディオ・ハーンの影響があったと思われる。

東京医科歯科大教授 若松秀俊



わかまつ・ひでとし 昭和二十二年、福島県生まれ、四十七年、横浜国立大学大学院修了後、東京医科歯科大学助手、足利工業大学助教授、福井大学教授を経て、平成四年より東京医科歯科大学教授。ドイツ学術交流会奨学生としてエルランゲン・ニュルンベルク大学研究員、その他、米国・オレゴン州立大学、韓国・釜山国立大学などの客員教授等を歴任。

【鐘】で知られる元長崎医科大教授の永井隆博士、哲学者の曙峻波三元東大教授、池田内閣で自治相を務めた赤澤正道氏らがいる。 ーテルン(昭和十二年生まれ)に

独人哲学者、フリッツ・カルシュ氏 日本を愛し、偉大な足跡残す

彼は明治四十四年、ドレスデンに於ける国際博覧会で「日本」と出合い、日本に強い興味を抱いた。第一次大戦に志願兵として従軍した後、軍隊を退き、マールブルク大学でニコライ・ハルトマン門下生として哲学を学び、一九二三年(大正十一年)に哲学博士の学位を取得、人智学の研究組織に加わった。 あこがれていた日本に来た彼は、ドイツ語講師として、松江市奥谷町官舎に住んだ。そして一時帰国をはさんで、昭和十四年三月 恵まれた。彼は絵が趣味で、余暇には愛する松江や周辺の田園を精密に描写した。彼の描いた宍道湖、嫁が島、袖師が浦、大山、山陰の農村の風景画が現在も二人の娘の手に半分ずつ保存されている。 彼は生徒にヨーロッパの精神生活を生徒に伝えながら、同時に自らの精神生活を磨き上げ、自分のライフワークである人智学的にみた東洋哲学史の膨大な未刊行原稿を残した。当時の日本を深く愛し、日本人々を慈しみ、自分の持てる知識を惜しまなく生徒に伝えた彼の著書には『カントとハルトマンの比較論述』(日独文化協会、昭和三年)があり、その他ドイツに関する著書(同協会、昭和九年)も出版されている。同僚の高橋敬視教授によるハルトマンの著書の翻訳は彼の紹介と協力によるものであった。 彼の研究は有史以来、人の思考が、哲学とどのように変化してきたのかを示すことであって、大きな興味を抱いていた禅と西田哲学への入り口がやがて明らかになる。 同博士に関しては、門下の酒井勝郎氏が『田舎の大学から』『カルシュ先生』(いずれも私家版、昭和四十四年、五十五年)で記述している。 松江高校を離任した彼は、予備役将校であることから、親交があったドイツ大使オット氏の仲介で在日ドイツ大使館の武官補佐官として昭和十五〜二十年まで国会議事堂近々の大使館に勤務することとなり、そこで終戦を迎えた。 彼の未発表の研究は哲学史と人の意識の進化に関するものである。スイスのドルナッハの「ゲー

彼の娘たちは人智学の基本に關する影響を両親から受けた。後に長女はその研究を行い、次女は帰国後、ヴァルドルフ学校に通い、マールブルク大学で学んだ後、ヴァルドルフ学校の教師になった。 終戦二年後に帰国。一九六一(昭和三十六)年には病気のため年金生活に入ったが、キリスト共同体の古巣のカッセルに移住し、ライフワークである人智学の知識からみた東洋哲学史に専念した。 昭和四十三年には、戦後も文通を続けていた、かつての生徒から招待を受け、二十一年ぶりに日本訪問。各地を回って、多くのかつての生徒と親しく過ごす時間を得た。この時、彼は出雲大社で、至聖の神に對面する願いがかなえられ、ここで自らの天命に対して神々に感謝の言葉を述べたという。 一月月の滞在後、帰国した彼は金婚式を祝い、翌年、脳腫瘍(しゅよう)のために亡くなった。七十八歳だった。 私は滞在したドイツで偶然にカルシュ博士のことを知り、帰国後、彼の教え子の多くが、いまなお彼を敬慕していることを聞いて、あらためて彼の業績を調べる必要性を痛感している。彼は若年期に夢見た風景と全く同じ風景を松江周辺に見ることができたことを、自らの人生の終末期に、周囲の者によく語っていたといふ。